

甲斐市立双葉西小学校 自己評価書

平成 30年2月21日 (水) 作成

校長 「一瀬 明仁」 記述者 職名 (教頭) 「長田 理」

学校教育目標 「ともに学び、ともに育つ」

学校経営方針

・基本：教師力の向上・信頼によるチーム力の発揮・創意ある協働

- 1 学校教育目標「ともに学び ともに育つ」を常に意識し、めざす「こども像」「学校像」「教師像」の実現に向け、積極的に教育実践に取り組む。
- 2 PDCA サイクルを生かし、より質の高い教育活動を構築する。
- 3 意欲的に研修に励み、専門職としての資質・能力の向上に努める。
- 4 信頼される学校づくりの実現に努める。

作成に当たって

教職員評価について

- ・これまで同様、A回答（そう思う）とB回答（ややそう思う）を合わせて肯定的な回答と捉えることとしAとBを合わせた回答率が90%を上回る項目は「達成できている」と評価する。
- ・肯定的な回答の回答率が80%を下回る項目は「本校の課題」とする。

保護者アンケート・児童アンケートに関して

- ・教職員自己評価と関連がある項目について適宜取り上げる。

1 全体評価

○教職員自己評価から

肯定的回答の内、100%が57項目中31項目、90%以上が26項目で、全項目、肯定的な評価であった。学校教育を全体的な視点で見た時、本校職員の職務への高い意識がうかがえる。自らの日々の活動が児童の成長につながっていると、教職員は実感しているのではないかと考える。

コミュニティー・スクールに関する項目においても、100%の回答が得られた。本年度は大きな異動がなく、安定した学校体制のもと、教職員が自信を持って児童の指導や学級学年経営、学校応援団の方々との授業を紡ぐ上での、協力体制作り等に取り組んできたことの現れであると捉えられる。今後も慢心することなく本校らしい教育実践の遂行に心がけていきたい。

○児童アンケートから

・肯定的な回答の内、100%の項目が27項目中1項目、90%以上の項目が17項目で全体の約67%である。80%の項目を入れると約85%の児童が各項目内容を肯定しており、大部分の児童が学校生活を中心とした自分の生活や活動などに満足している様子がわかる。また、コミュニティー・スクールとしての視点では、地域の方々と紡ぐ授業に有用感を感じている児童が99%に上る等、コミュニティー・スクールとしての成果が定着していることがわかる。

反面、読書への取り組みにおいて課題がみられる。また、「授業中質問しますか」の項目が80%を切っていること、困ったことを相談できない児童が10%弱いるなど、数値は低いが決し

て、これらの課題は見過ごすことなく意識を高く持ち、それらの課題の改善に対応していきたい。

・昨年度よりも、10%程度向上した項目

Q11 授業中質問や意見を言っているか……………79.8% (H28+11.8%)

Q13 家で各学年の目標学習時間をやっているか……89.9% (H28+9.6%)

このことから

*各学年学級の授業改善が進んでいることがわかる。

*家庭学習の大切さが、児童・保護者・教師の三者で共有され、家庭学習の手引き等が有効に働いていることがうかがえる。

○保護者アンケートから

・26項目中9項目が90%、80~90%の項目が10項目で全体の約73%に上った。このことから、7割ほどの保護者が、児童が充実した学校生活を送っているという肯定的評価をしていることがわかる。

・昨年80%以下の項目であったが今年度は80%以上になった項目は

Q21 将来の夢を持っているか……………80.7% (H28+8.3%)

Q25 外遊びの奨励など健康教育に取り組んで入るか…82.5% (H28+9.8%)

・肯定的な回答が80%を超えなかった項目を挙げてみる (H28は上回っている)。

Q13 自主学習をしているか……………54.3% (H28+2.2%)

Q14 困ったときの相談相手がいるか (友達) ……67.4% (H28+2.8%)

Q15 困ったときの相談相手がいるか (先生) ……72.3% (H28+2.3%)

Q26 ショートタイム等言語活動への取り組み……………69.9% (H28+6.4%)

このことから

*木曜スポーツなど体育的な取り組みの成果が現れてきていることがわかる。

*80%は超えていないものの、学級学年経営をはじめ、自分の将来や未来に向けて夢と希望を持てるような様々な取り組みと教職員の不断の努力等が少しずつ成果を上げてきていることがわかる。

*QUテストの有効な活用や一人一人の児童の「想い」に寄り添うことの重要性を理解し、様々な活動や取り組みに邁進するチーム双西の取り組みが成果を上げてきていることがわかる。

2 項目ごとの評価結果 (達成状況・改善策)

I 学校教育目標に関して・学校経営について

達成状況
・8項目の内、3項目 (目標と経営方針のマッチング・P D C Aサイクルが機能している・職場の福利厚生への配慮) は100%達成である。その他の5項目 (経営方針に基づき活動している・学校目標と学年目標のマッチング・計画に基づいての実践・P D C Aの実践・目標を意識した指導の実践) は90%以上の達成率となった。昨年度から引き続き着実な学校運営が全教職員のチームワークにより取り組まれていると判断している。

・P D C Aサイクルを生かした実践の達成率・学校教育目標を意識した指導はAとBを合わせて95%以上あり、昨年度より約5%改善はしているものの、Aが70%台と80%を切っている。より向上していくためには、A評価を80%台まで上げていく必要があると考える。

改善策
項目5 (P D C Aサイクルを生かした教育活動の取り組み)

・学校長が常日頃から職員を指導している内容の中で、活動の目的の明確化ということがある。活動の目的が明確化できていないと、プランを立てる段階で中身のない内容になることが危惧され、それをもとにしたP D C Aサイクルは機能しないであろう。この点について意識した取り組みが期待される。

項目8 (学校教育目標を意識した指導)

・本校の学校教育目標は、コミュニティー・スクールとなった本校が新たに掲げたという側

面と、教育の不易（いつの時代でもどんな特色を持った学校であろうとも変わらない究極的な目標という意味）としての側面を併せ持つ目標であることを改めて教職員全体で意識を共有したい。前者の側面であれば、児童と教職員と地域がともに育つような学校をめざそうというものである。地域とともにという部分が本校の特色といえる。それは、すなわち、地域と紡ぐ授業を構築するということに他ならない。そういう意識を持ち、それぞれの学年において核となる単元内容を見定め、単元構成を構築する上でどのように地域と紡ぐのかを検討していく必要があると考える。

II 学校運営について（保護者用アンケート等も含めて）

達成状況

教職員評価

- ・12項目のうち、100%の達成率が4項目（施設設備の保全・校務分掌が機能している・特別支援体制が機能している・児童の健康管理）にわたる。残り8項目（危機管理・個人情報保護・職員会議・教職員の相互信頼・報連相確体制・主体的な校内研究体制・教職員の服務自覚・コミュニティー・スクール）も90%以上の達成率を示した。
- ・学校長のリーダーシップのもと、教職員は学校運営に関する視点（項目内容）を十分に意識し、校務分掌を中心とした職務に誠実に丁寧に取り組んでいることがわかる。また、自分の分掌以外の職務への参加意識が高い職員が多く、若手や中堅職員の指導を積極的に行い、人材育成にも寄与する意識が高い職員が多い職場である。
- ・全項目で高い達成率を示しているが、Q2の危機管理の部分はA評価が36%、B評価が56%とB評価の数値が高い。A評価が50%以上となるよう取り組むことが重要である。

保護者アンケート

- ・Q12のコミュニティー・スクール運営に関連して、保護者アンケートQ24〔学校は地域人材の活用を図っているか〕という項目において、88.5%の肯定的評価が示されている。教職員も保護者もコミュニティー・スクール運営が順調に推進されているという実感を持っていることがわかる。
- ・Q10の児童の健康管理に関して、保護者アンケートQ25〔学校は外遊び奨励など健康教育に力を入れている〕という項目において、82.5%の肯定的評価が示されている。教職員も保護者も児童の健全育成に手応えを感じていると捉えられる。

改善策

- ・Q2危機管理マニュアルの理解という点において毎年課題が残る。危機意識を持てるような避難訓練等の実施が必要であるが、なかなか、実施できないでいる。防災担当の行動力のなさに起因している。来年度に向けては、有用な防災関連の取り組みを推進する意識が担当者に必要である。

III 学習指導について（児童生徒用及び保護者用アンケート等も含めて）

達成状況

教職員評価

- ・全10項目の内、3項目（基礎基本の定着・個に配慮した授業・ALTと連携した外国語活動）は100%の達成率であった。残り7項目（民主的な学級学年学校作り・学習意欲を喚起する授業の実践・評価規準の明確化・教材教具を活用した授業・質問や発言の授業の構築・特別支援教育の確立・家庭学習のサポート）もすべて90%以上の達成率である。

保護者アンケート・児童アンケート

	<ul style="list-style-type: none"> ・充実した学習指導が行われていることは、児童アンケートのQ1 [学校は楽しいですか] のA B評価及び保護者アンケートのQ1 [お子さんにとって学校は楽しいところだと思う] のA B評価とも 95%以上の達成率であることが何よりも物語っていると判断している。 ・児童アンケートのQ5 [学校の授業は楽しいですか] のA B評価は 92.1%、Q 6 [先生はよく授業を教えてくださいますか] 98.9%、Q7 [国語の授業はわかりますか] 96.6%、Q8 [算数の授業はわかりますか] 94.4%、Q9 [授業でわからないことは先生に聞いていますか] 91.1%、保護者アンケートQ8 [お子さんは授業の内容がわかっていると思う] 84.8%、Q 11 [学校は熱心に授業に取り組んでいる] 90.7%の項目評価からも、本校の学習指導がおおむね成果をあげていることがわかる。 ・しかし、各項目とも、少ないものの、楽しいと感じていなかったり内容がわからないと思っている児童がいる。この事実を決して見過ごしてはならない。一人一人の児童の実態に寄り添い、粘り強く指導を継続していかなければならない。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容の理解や定着に課題を持つ児童に対して、一人一人の実態に即して、指導の工夫を常に図り、個別指導を継続していくことが必要である。 ・学級全体で授業に取り組む際にも、やまなしスタンダードを着実に実践していかなければならない。 ・基礎基本を習得する段階においても、アクティブラーニングをベースにした授業構築を実践していけるよう個人でも学校組織全体としても研修を積み段階的に授業力のアップを図っていく必要がある。
IV 生徒指導について（児童生徒用及び保護者用アンケート等も含めて）	
達成状況	<p>教職員評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8項目中、4項目（児童理解のためのコミュニケーション・生徒指導上の課題の共有・児童の健全育成のための関係者及び関係諸機関との連携・児童理解のために記録をとる・きめ細やかな観察をするなどの適切な対応をとっている）は 100%の達成率であった。 ・残りの4項目（規範意識育成指導・キャリア教育の実践・いじめ不登校の早期発見早期対応・生徒指導の共同指導体制の確立）においても達成率 90%以上であった。 ・生徒指導に関しては、特に、学校の中の共同体制が生徒指導主任を中心に教職員の共通理解のもと、連携が図られていることが一番大きいことであると考えている。 <p>保護者アンケート・児童アンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートQ6 [学校は子どもの間違った行動を指導している] 88.6%、児童アンケートのQ2 [仲のよい友達の存在] 96%、Q3 [相談相手（友達）の存在] 90%、Q4 [困っている人を進んで助ける] 95%等の結果を見ても、生徒指導が浸透していると判断できる。 ・同じく児童アンケート項目の中で、挨拶・規律・委員会活動への取り組み・清掃活動への取り組みなど規範意識の有無を問う内容項目においても 90%以上の達成率であることから、本校児童は、規範意識が高い児童が大多数であることがわかる。 ・自己評価Q3 キャリア教育及びQ7 児童理解への対応（観察・記録）において、A評価がそれぞれ 50%・65.2%、B評価がそれぞれ 44.4%・34.8%とB評価率が高い。まだまだ、有効なキャリア教育の実践が不足していること、適切な児童理解が不足していることを示している。 ・児童アンケートの項目で、高い達成率を示している項目でも、数は少ないが、仲のよい友達がいないと答えている児童が 11人いるし、相談できる友達がいないと 25人の子どもが答えている。また、13人の子は進んで人助けはしないと答え、35人は学校のことは家の人にはあまり話さないと答えている。その他の項目でも、否定的な答えをする児童がわず

	<p>かでもいることを見過ごしてはならない。(将来の夢・決まりや約束を守る等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就寝時間に関しては、大部分の児童が適切な時間に就寝しているが、一部の児童において、就寝時間が遅い子や布団に入ってもゲームなどをしていたり本を読んでいたたりしている児童が高学年にいる。指導していきたい。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・孤立感がある児童や規範意識が薄い児童等への対応については、日常の学級学年経営の基礎基盤を、インクルーシブ教育の観点から常に振り返りと改善を欠かさない不断努力が求められる。 ・些細な児童からのシグナルを見逃さないきめ細かな児童理解が必要となる。日記のやりとりやピアサポート的な手法による学級活動を行うことで一人一人の児童の看取りが可能になると考える。
V 地域との連携について	
達成状況	<p>教職員評価・保護者アンケート・児童アンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10項目中、8項目が100%の達成率であった。残り2項目も90%以上の達成率である。関連する保護者アンケートQ18 [地域の人への挨拶の奨励] 87.3%、Q18 [地域行事への参加] 85%、Q24 [学校は地域人材を活用している] 88.5%、並びに、児童アンケートQ16 [地域の行事に参加しているか] 88%、Q18 [地域の人に挨拶をしている] 97.8%、[地域と紡ぐ授業は役立っている] 98.9%という以上のような結果から、教職員も児童も保護者も、コミュニティー・スクールとして地域と共にある学校という理念が確実に継続的に実現できているものと捉えていると判断できる。
VI 学校の特徴に関して	
達成状況	<p>教職員評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9項目すべてにおいて100%の達成率であった。 ・Q7 [家庭学習が充実するように指導している] のA評価が75%と80%を切っているが、学校だけの取り組みに限界を感じているのではないかと推察される。 <p>保護者アンケート・児童アンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報発信の項目(保護者アンケートQ3 各種お便り、HP Q4 保護者や地域の要望の受け入れ風土 Q 参観日や解放日の設定)において、AB評価がそれぞれ、94.4・87・96.7%と高評価であった。また、児童アンケートQ14 (学校のことを家で話すか) は87%である。学校は積極的に情報を開示し、保護者はその情報の開示を享受できている状況といえる。児童も学校でのことを家で話す子が大半で学校と子ども・保護者が互いに情報を共有し合える環境が整っているといえる。 ・家庭学習の項目のうち、宿題・家庭自主学習の定着率を保護者は54.3%と判断している。また、各学年の目標家庭学習時間を89.9%の児童はやっていると答え、宿題も93.3%の児童がやっていると答えている。保護者の53.3%とはだいぶずれが見られる。何か認識の差があるのだろうか。 ・読書活動においては、教職員は、AB評価で100%指導に努めていると答えてはいるが、児童アンケートQ19 及び保護者アンケートの [1日どのくらい読書しているか] を見ても読書時間はとても少ない。学校での取り組みにおいては、前述したとおり、様々な取り組みを行い読書の奨励に努めているが、家庭読書が充実してきているとはいえない現状と

いえる。

- ・読書の取り組みに関しては、学校は司書を中心に学校内での取り組みや家庭での読書の奨励の取り組みを継続しているが、不十分という結果がどのアンケートからもでた。まずは、学校内の取り組みとして、業間時間で読書に今まで以上に組み入れる様な環境作りを行い、その成果として家庭での読書へとつなげてはどうかという意見もあった。家庭への啓蒙も引き続き粘り強く行っていきたい。

3 まとめ

<成 果>

- ・教職員は、日頃より非常に高い課題意識を持ち、連帯感を強く持ち教育活動を推進しており、学校教育目標に基づいた適切な学校運営がなされてきていると判断している。
- ・地域と保護者と学校が非常に良好な関係を引き続き築いてきており、コミュニティー・スクールとして「地域と紡ぐ授業」が展開できていて、双葉西小スタイルが安定的に継続していると判断している。
- ・児童は、全体的に親和性に富み、6年生を中心に明るく元気に素直に健やかな成長をしてきている。
- ・発達に特性を持つ児童の居場所作りへの取り組みや児童一人一人の自己有用感の育成というインクルーシブ教育の理念がしっかりと根付いてきている。

<課 題>

- ・全校的・全体的に見ると、児童も教職員も保護者も肯定的な評価が際立つ結果になっているが、どの分野のどの項目にも数値は低いが必ずネガティブな回答を通して、シグナルを送る児童や保護者がいることを決して忘れてはならない。その一人一人の特に児童(むろん保護者もだが)がどんな「想い」をかかえているのか、どんな心身の状態にあるのか、我々はそれらに思いをはせ、常に向かい合わなければいけない。そのことから結果として逃げてはならない。その「想い」を持つ児童が仮にたった一人であったとしても、である。教育の営みとは、結局そこに帰結するのではないかと考える。
- ・「やまなしスタンダード」の授業スタイル(アクティブラーニングを核とした)は、全員が100%身につけていかなければならない。お互いに授業を見合い見せ合う等する中で切磋琢磨し授業力の向上に努めたい。そのために校内研究の枠にとらわれず、自由にのびのびとお互い学級の中に入りやすい雰囲気作りを心がけることが大切であると考えます。
- ・外国語活動や外国語科の授業への取り組みについては、これからしっかりと取り組んでいかなければならない。
- ・特別の教科道徳の実施に向けて、教職員の研修を推進していかなければならない。
- ・保護者アンケートに関して、毎年の課題だが「学校の様子がわからない・子どもの友達がわからない・相談できる友達や先生がいるかわからない」など「わからない」という回答が今年も多い。各種たよりやHPを通して、これまで以上に学校での諸活動の様子などの情報を発信していく必要がある。
- ・諸課題の中で、本校の特色であるコミュニティー・スクールとしての強みを発揮し、課題解決につなげられることを洗い出し、その解決方策を検討していく必要があると考える。